



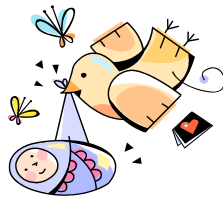
新シリーズ  
《北海道のポーランド人から》

# 百聞は一見に如かず

～日本でPTA会長を体験して～

ラファウ・ジェプカ

来日する前から日本の子供の生活の恐ろしさについていろいろ聞いていました。生まれてすぐ教育レベルの高い幼稚園に登録され、幼いときからどんな大変な状況にも耐え、打たれても壊れない会社員になるために朝から晩まで兵隊のように育てられるというイメージに私は怯えていました。そのため、札幌に来て日本の子供たちの笑顔を見たときは、本当にホッとしました。でも心の中では「これは刑務所から一時出所した嬉しさの表情かもしれない」といった疑念が離れませんでした。二、三回聞いたり読んだりした話がいったん頭に刷り込まれると、取り除くのはとても難しいと痛感させられました。



日本の子供に対するこのようなステレオタイプはいったいどこから来たのかすぐには思い出せませんが、おそらくその大きな源となったのは、日本に関する旅行記や面白おかしく煽り立てるような記事などです。このような記事は 21 世紀になってから目立って増えてきましたが、すでに 1970-80 年代にポーランド人が書いたものにもそのような傾向がありました。のちに英語で読んだ本でも同じような話を何度も見かけたので、多分著者が面白いと思った話に尾ひれがついて、いろいろなところで繰り返されてきたのだと思います。

こうしたステレオタイプを作り上げてきたもうひとつの大きな要因は、ポーランド人同士が会話をするとき、何かについていいことばかりを話すと、自然と「悪いところも言わないといけない」とバランスを保つためにネガティブな「逆の面」も話題にするという傾向で、日本好きの集まりでも「日本人は家族を大事にしない」「日本は引きこもりの国」「日本人はクジラやイルカを殺し過ぎ」など、日本の社会問題について議論が絶えません。

日本に来て、それらの問題が実際どれほどの

## Rafał Rzepka

1974 年シチェチン生まれ、ボズナニ大学新言語学部卒(日本語学修士)、日本政府奨学金を受けて北海道大学、小樽商科大学に留学、北海道大学大学院工学研究科博士課程修了、現在は同情報科学研究科助教として人工知能の研究に従事。家族は妻と一男。



規模のものなのかは分かりませんでした。テレビにはそういう話題が出ないよう政府がマスメディアを管理しているのではと、社会主義の「嘘」の時代に育てられた私は自然に考えがちです。

しかし、日本語がちゃんと読めるようになり、直接日本人の友達と話したり、インターネットで調べたりできるようになると、日本社会の自由度が分かってきました。問題の規模や一般的な日本人の考え方など、両面を見ながら確認できるようになりました。事実の両面性という問題に興味を惹かれたので、コンピュータによるバイアスのない情報抽出を研究テーマの一つにしました。

とはいえ、私が日本について完璧な知識に達したわけではありません。友達の数も限られています。同じような考え方を持つ人と仲良くなるので、そこから形成される考えはどうしても偏りが出てきます。このように限られた人を通じた知識の形成には限界があります。それではインターネットという手段はどうでしょうか。インターネットで得られるすべての情報を読むのは不可能ですし、コンピュータプログラムに抽出してもらっても、現状では、コンピュータによる言語理解の技術は



意味の処理という点ではまだまだ未熟で、やはり誤った知識が形成される可能性が高いのです。

そこで思ったのは、やはり自分自身の努力が不可欠ではないかということです。日本の大学に入学してその仕組みが大体分かってくると、日本の大学に対するネガティブなイメージはほとんどが作り話だと判明しました。



つぎの心配は、日本に生まれて育てられる子供の将来を決定する環境でした。妻は日本語の勉強をしながら同じ北大でポーランド語を教えていましたし、子供には日本語も必要だと思って長男を保育園に入園させることにしました。ポーランドではそもそも「保育園」(złobek) 自体が非常に評判が悪いので、ポーランドにいる私たちの母たちはパニックになりました。子供がポーランドのやり方のようにほっとかれるか、日本のやり方で兵隊のように厳しく育てられてロボットになるのではないかと心配したのです。

しかし、私たちはステレオタイプの多くが嘘だと分かり(そのほとんどは程度の差か、場所による違いです)、いくつかの保育園を見学し、楽しそうに笑いながら走っている子供たちの姿を見て、ちょっと安心して預けることにしました。それでも心配は残っていましたが、まだ言葉をしゃべらない息子から保育園の出来事を報告してもらうことは不可能なので、先生方が書いてくれる「連絡帳」という情報を唯一のソースとして活用しました。

そのうち突然、保育園をもっと知るためのチャンスが現れました。それは「後援会」です。親が集まり、園長先生や他の保育士のみなさんといろいろなイベントを企画する会です。その集会にはどんな質問でも答えてくれる先生たちと、似た悩みをもつ親たちが参加し、とてもためになったので、さらに大きな安心を得ることができました。活発に参加し一生

懸命な姿を見せてしまったため、私はどんどんと組織の前面へと押し出されました。後援会長に祭り上げられ、勉強だけではなく、例えば子供の安全のための活動にも参加することになりました。

このような経緯で、長男が小学校に入学したときは、躊躇せずに PTA の活動に参加しました。最初は学級代表、そのあとは PTA 副会長に誘われました。保育園と比較したらいろいろ忙しかったので、会長にならないかと誘われたとき、副会長より楽そうに見えたので会長を選びました。普段使わない敬語の多い挨拶がメインの仕事だと聞いて、やっと自分の日本語の大きな弱点の一つをなくすチャンスにも見えました。もちろん他にも大きな理由が二つありました。一つは日本の学校を中から見るができること、二つ目は外国人の立場からのメッセージを発することでした。

「外国人だから無理」というセリフはよく耳にしますが、現実には「地元の言葉が出来ないから無理」というケースが多いと思います。「文化や考え方が違いすぎる」というのは言い訳に過ぎません。個人の「事実を知る気のなさ」と社会の「やる気のなさ」が問題だと思います。

異国の生活や文化に関して、書物やメディアをにぎわせるプロの文筆家の発言には、編集者に面白さをアピールするための誇張もあると思います。国の本当の姿は近くから見るべし、ともいえます。

そこで、専門家ではない私たちが日本の文化、ポーランドの文化について、自分自身で経験したこと、感じたことを率直に《Pole》のようなポーランド好きの方々向けの会報に書くことは、とても価値のあることだと思うのです。ぜひ《Pole》の読者のみなさまといろいろな経験をシェアしたいと思います。今後は北海道に住んでいるポーランド人の声を集めて、ご紹介していきたいです。



PTA 会長として入学式で挨拶する筆者



運動会の挨拶で活躍する筆者